

生命倫理問題を浄罪（クレンジ）しようとする医学医療学 界

Wesley. J. Smith （科学の蜂起 Science Uprising 運動）

December 3, 2019



（訳者 Greatchain, 2019/12/03）

ここに書かれていることは、私も一「脳出血」患者として、ごく最近、経験した世界の危機ともいべきかなり恐ろしい問題である。偶然か必然か、これを訳すに至ったことも不思議である。この写真の示す通り、世界は岐路に立って――立たされて――いる。細かいこと、具体的なのとは言うことができない。しかし肝心なことは言わなければならない。私の病気がこれで済んだのも、ラッキーだったということさえある。かなり難度の高い文章だが、とにかくこれを読んでいただきたい。

医学医療やその関係の職業的学校に入学することは、やがて、良い成績だけでなく、適正な道徳的な見解をもつことに、大きく依存するようになるだろうと思われる。

たとえば、あなたが優秀な学生で、将来、腫瘍の専門家として、何千もの人の命をガンから救うことを夢見ていたとしよう。あまり遠くない将来、もし何人かの“生命倫理学者”が、彼らの思い通りを貫くなら、あなたは自ら進んで、あなたの救えない人々はすべて、安楽死させるようにするのがよいだろう。そうしないとあなたは、医学部に入学させてもらえないだろう。

あるいはあなたが、経験の浅い、小児科の内分泌科医師で、思春期の子どものホルモン・バランスと病気を、克服する希望をもっていたとしよう。そんな夢が達成されるには、かなり厳しい道徳的代償を要求される可能性がある。また、あなたが苦労して得た経験を、性的にもたらされた発声困難によって、無意味なものにしたくなければ、あなたは靴屋になるか、トラックの運転手になるほうがましだろう。

医療職業をクレンジングする（浄罪する）

現在行われている医学的職業の、道徳的クレンジング運動は——メディアと、生命倫理の攻撃的政策によって、「医学的良心」に相反して戦われているが——それはやがて拡大して、未熟の医者、看護師、それに薬剤師たちに、職業的教育を与えないようにするであろう。特に、カナダの生命倫理学者 Udu Schuklenk は、通常、主流の、功利主義的な生命倫理の見方を口にしており、彼が特に明確に理論化しているのは、望ましくない「生命の聖域」倫理観をもっている学生を、医科大学へ入学させないように、彼らを追い出すことである。

「シュークレンクにとって、そのような議論 [すなわち、優生学、人工中絶、トランス・ジェンダーなどについての議論] をさせないように、実を結ばせないようにする、可能な方法は、医科大学に入学する以前に、すでに、良心という根拠から医療を施すことに、自分は反対だという、意見を言わせることである。

これを可能にするやり方は、調査をしたり、医学校志願者にアンケートしたりして、率直な意見を言わせ、ある特定の種類の医療を施すことに、彼ら自身が反対であるかどうかを尋ねてみることである。

「我々が今、問題しており、現在アルバータで彼らが考えているような、法制化につながる諸問題は、こうした自分の個人的信念を、独占する医者たちのもので、究極的にこれは患者の福祉をめぐるものだ」——と、シュークレンクは、グローバル・ニュースに話した。

「医学部、薬学部は、自分たちの独自性を主張すべきであり、これらの（常識的な）医療サービスを提供する気のないことが、すでに判明している志望者たちを、基本的に除外すべきだ。」

逸話となっていることだが、私は、プロライフ（生命優先）を主張している医者や看護師の人々から聞いた話として、そのような選択が、すでに公的方針の外部で行われているのは、確かである。

間違っではいけない

シュークレンクやその徒——医師の良心に反対する名うての男 Ezekiel Emanuel など——は、頑として大真面目に、医療業界内部のすべての異論を押しつぶそうとして、これを文化的パラダイムにまで押し上げようとしている。彼らは、有力な医者、看護師、薬剤師、それにすべての「誤った」考え方をする施設、特に「宗教的」で、プロライフの類いのものを、道徳的にクレンジ（浄化する）計画をもっている。

なぜだろうか？ 礼儀や禅譲の余地はないのだろうか？ それがないのだ！ これは患者が、自分の欲しいものを、欲しいときに受け取るという話ですらない。それは死ねという話でさえある。もっとはっきり言えば、その目的は、医者 of 伝える「強力なメッセージを黙らせる」ことである。患者はこう言われる——「いいえ、それはしてあげられません。それは間違っただけですから。」

私はこれを、短い期間であったが、私のかかったある医療機関で、つぶさに観察した。とげとげしい印象とともに、その反対の「やさしい」人々の、逆の印象は疑うべくもなかった。つまり職員間の対立ということである。ここに書かれているだけでも、なぜこういうことが起こるのかが推測できるだろう。これはちょうど、アメリカの民主党の間で起こっている、破れかぶれの、クーデタ寸前の対立に似ている。実際これは、クーデタ寸前であろう。

もう一つ私が、非常によく似ていると思ったのは、かつての中国文化大革命の「紅衛兵」である。彼らはやはり、共産主義の絶対的正しさを信じて、教条主義の、厳然たる整然たる行動をした。私の体験した「タカ派」の人々もそうだった。また、この見出しの写真の

ように悩む人々もいたはずである。詳しいことは言えない。幸い私は、脳出血で意識は混濁していたが、最悪の結果にはならなかった。

この時代、あらゆることが、まさに「混濁」している。唯物論、無神論、進化論、優生学、共産主義、男女流動論などすべてが、ニセ物、食わせものであり、ゲスの論法を装っている。神しかありえず、すべてが神だという証拠が、これほど歴然としているにもかかわらず、メディアに抱き込まれた世間は、何ひとつ知らないというふりをしている。

——以上